

# 世界史の中の現代の幼稚園の課題

——ヨーロッパ会議報告書に見る——

津守 真

## 一

最近送られてきたヨーロッパ会議の教育プロジェクトレポート「移民の教育・文化の発達」<sup>注</sup>に、私は感銘をうけた。

この二十年間に、ヨーロッパでは外国からの移住者を、これまでにない程多数受け入れなければならなかった。東南アジア、トルコ、アフリカその他の国々からの移民の多くは、現代では新たな定住者であり、その子ど

もたちはいまや就職の年令に達した。この間に学校が経験したことは、ヨーロッパの教育に大きな変化をもたらした。一九八六年十二月に刊行された、ヨーロッパ会議（Council of Europe）のプロジェクトNo. 7 「移民の教育・文化の発達」<sup>注</sup>の最終レポートは、この問題を扱っている。

日本には移民が少ないからこの問題は関係がないなどと云うことはできない。外国にゆく日本の子どもたちが、西欧の学校ではすぐに馴染むのに、日本の学校にも

どったときには、多くの問題を生じていることも、この問題と関係がある。また、日本の社会全体が、移民を受け入れるのに抵抗があり、この問題と直面することを拒否している。西欧の教育者たちは、過去二十年間、この問題と真摯に取り組んだのだと思う。

このレポートで、異質な文化を統合する教育の考え方を、インターカルチュラリズム（Interculturalism）と云っている。その根底には、次の四つの要素があるという。

「a、今日までの歴史において、われわれの社会の多くは複数文化によって成り立ってきたし、今後、次第にもっとそうなるだろう。

b、それぞれの文化は、自身の独自の文化をもち、それは尊重されねばならない。

c、ひとつの社会の中に複数文化があることは、社会の潜在的財産である。

d、複数文化を現実社会の財産として生かすため

には、そのいずれの独自性をも消すことなく、相互交流と相互作用をなしとげなければならない。われわれは、複数文化の力学を生かしてその状況を真に異文化間教育の場としなければならない。」

すなわち、ここでいう異文化間教育（Intercultural Education）においては、同化ではなく、統合の原理が考えられている。たとえば、フランスの学校が、カンボジアやアフリカの移民の子どもを受け入れたとき、フランス語とフランス文化に同化させるのではなく、それぞれの母国語をできる先生を用意し、両者が共存してひとつの学校社会をつくるようにするのである。実際には容易なことではないだろうと思われるが、相手を生かす道を最大限に開いてゆこうとする考え方である。

自国の文化の過去の伝統に固執するのではなく、異質な文化を統合することにより、生命力を得て新たな文化を未来に向けて創造することができるとの考えが根底にある。

報告書は三部より成る。第一部「今日の異文化間教育——方法論」 第二部「ヨーロッパにおける移民と社会——最近の変化とその教育的、文化的意味」 第三部「展望と結論」 全体で一〇八頁に及ぶ大部の報告書である。

## 二

報告書は、ヨーロッパ共同体（EC）加盟十数カ国の代表から成る委員会によって作られた。第一部にこの委員会の考え方が率直に述べられているので、次にその部分を主として紹介したいと思う。

① 「われわれは、象牙の塔に終止符をうち、真空の中で仕事をするをやめた。ここで考えられている問題は、開かれた心、たえざる討論、常に変化する現実に注目することと、一緒に仕事をしてゆく心の準備とを要求している。」（P・2）

このことは委員会の基本的態度を示している。委員会には既にあるいかなる専門の権威に頼るのでもなく、動いている現実と取り組むことを最初にきめた。この点で、はじめから方向は明瞭であった。また、委員会は全員の納得のもとで進められた。委員長は単独で決定をせまられることはなかった。各メンバーがそれを助けた。

現代の特色は専門領域の増大である。それは知識の技術化を反映している。「社会関係、人間関係の複雑な分野で技術的性格が増大することに伴う危険は、明白かつ多大である。人々は、自分と他者とに関する重要な決定をするのに、その責任を専門家に委ねてしまう。」委員会は専門家に頼ることをしないとところからはじまった。

② 「この問題に関しては全員が同舟であった。」（P・2）

異った文化からの子どもたちが現実周囲にいること、その教育問題が眼前にあることに関しては、委員会の全員が同じ運命の中にいることを自覚していた。その

故に、この報告書でとられた方法が全員一致で採択されたのであった。この異文化の問題は、不平等と葛藤、対立と抑圧、差異と反感と同時に、寛容と開かれた心、共通の目的と協力、親近感と同情を内に含んでいる。そのことに気付いたときに、移民の問題は、「歴史の全体が関与している問題」であることへの洞察が生れたのであった。「このことが、委員会が何故に、インターカルチュラリズム（異文化間教育）」という考えを採択したかという理由であった。」

③ 異文化間教育は、引力の法則や科学的知識のような科学的に証明されたこととは異なる。それは教育的選択である。したがって、これは「現実であると同時に賭け」（P・4）である。きまった手順に従って実施すれば成功するという性質のものではない。

これは理想を追求める「自由主義」の考えとも異なる。ここには、ひとりひとりの子どもが最善の発達をするようにという現実の課題がある。問題は何が望ましい

かではなく「何が存在するか」であり、「未来ではなくて現在が重要である。」

④ 一度限り、権威ある記述をすればそれで事足りるとの考えは、独断的態度と無意味なおしやりへの第一歩である。最初から、委員会の共通の関心は、現実を動かさないものに固定することではなく、動いている現実の中にある本質を発見することであった。すなわち、現実を構成しているエレメント（要素）を発見することではなく、エヴォリューション（展開）の語で考えることであった。

⑤ 科学性を主張する人は、観察しうるものがないからと云う理由で、まだ目に見えていないものの存在を拒否する。これは人間科学の分野が一世紀前からぶつかった問題であった。「変化への敏感さとそれを記録する能力は社会科学の中心をなす。」（P・6）すでに存在するものを観察するだけでなく、現に行方しているわれわれと

の関係の中で変化しうるものに着目せねばならない。

社会・歴史的概念は、人間によって構成され、たえずつくりかえられる性質のものであって、観察されたあらはじめ存在する現実に付せられるラベルではない。「もしも人間科学の知識が、経験的観察という単一のテストに耐えねばならないとしたら、それは存在しないことになるのみでなく、科学者は手を持たないことによって手をきれいにしておくという古典的ジレンマに陥ることになる。」

「インターカルチュラルということ、概念としても現実としても存在しないと見なすことは、科学的というよりも実証主義者の態度である。これは科学的方法論全体としては、ハードサイエンスを含めてもはや通用しないことは、バシュラールが十分に論じたところである。」

(P・6)

そこで二つの立場がとられることになる。第一は状況を人間学的に分析することである。第二は科学がつくられる前にアクションがなされねばならないことである。

科学は終りなくつづけられる問いであり、アクションは一般的方向がきまれば、なされうる。

⑥ 移住者の教育は、いわば磁石と地図だけを手にして、常に進行しつづけなければならぬ。何となれば、状況がそれを要請するから。外国人嫌いとは民族主義の復活を考えただけでも十分な証拠であろう。図面が完全にでき上がるまでもしれないとしたら、とり返しのつかないことになるだろう。

「われわれは狭い意味での実証主義的技術主義から手を切らねばならぬ。また制服を着たような単純な運動主義を避ける。(それは差し迫った理由の故に、また、教条的イデオロギーから見境なく敢行する)」(P・8)

⑦ 伝統的分割や、前もって考えられたいかなる分類をも拒否すること。民族主義と外国人嫌いを拒否すること。「拒否はそれ自体肯定である。われわれはこれを望まない。もはやそれはわれわれが受け入れることのでき

ない考えである。われわれはそれと戦うと云うことである。」(P・8)このことは、過去においても現在においても、民族主義に反対するすべての行動の基本である。たとえまだ詳しく説明できなくとも、何に反対するかに關して疑いを残さないことは重要である。

⑧ 「インターカルチュラリズム(異文化間教育)の主張は、プリンシプルの宣言である。それは現在の状況とは明らかに対照をなす目標、従うべき方向を探し示す。それは志向される方向である。」(P・9)何を拒否するかについて一致していれば、意見や理論は異っていても協力することができる。

方法的にも、認識論的にもあらゆる条件が保証されてから着手することも可能であろう。しかしそれでは論点は「歴史の風の中で」雲散してしまう。処方箋は成功しても、患者はその間に死んでしまう。それでは未来は築かれず、人々は自分がコントロールできない事柄に依存せねばならなくなる。

報告書の第一部の概要を紹介したが、委員会が、人間として率直にこの問題に取り組んでいる姿をうかがうことができる。このような報告書を公共のものとして作ったヨーロッパの教育者たちの見識と勇氣に敬意を表せざるをえない。報告書はひきつづき、第二部で具体的提言に入り、その中に、家庭、就学前施設、義務教育、職業準備教育、職業教育、地域、情報メディア、芸術分野とこまかく述べられている。

また、教育と文化とは切り離しえないこと、子どもと大人とは常に一緒に考えられねばならないことが一貫して強調されている。

### 三

画一化は、ここでのいうインターカルチュラリズム(異文化間教育)とは対照的である。

よく考えれば、教育の場は、どこでも、異文化の子ど

もたちの集まる場所である。現代の世界の特色である異民族間の交流は、すでにある教育問題を拡大して見せているにはかならないのではないか。

日本の教育は、同質に近い集団の中で、ごくわずかの異質性すら容認できないのではないか。大多数の社会に適応している人々が、異質な少数者がこのように振舞わざるをえない状況を同情的に理解することができないでいる。国際教育は、外国語教育以前に、異質な他者と一緒に共同の生活をつくる体験をするという基本的なことにこそ第一の課題がある。それは幼児期から始まる。

幼児の集団は、本来、最も民主的になりうる基盤をもっている。皮膚の色が異り、言語や行動の仕方が異っても、保育者がしっかりとしていれば、幼児同士はすぐに一緒に遊べるようになる。そして、大人が予想する以上に、力動的でたのしい集団をじきにつくり上げる。そのような体験をした子どもは、異質な他者を、自分の仲間と感じ、それは一生を通じて他者を受けいれる基礎となる。

るであろう。

自分と違った人を受けいれて共同の生活をつくることは、いつの時代にも変ることのない幼児教育の課題であったし、これからの世界でますます重要な課題であろう。

幼稚園・保育園は、異質な子どもたちを入園させるだけでなく、保育の質を真にインターカルチュラルにしてゆくことがこれからの課題であると考ええる。

おわりに

私は最近 OMEP（世界幼児教育機構）の日本国内委員会の世話役をしている。その関係で、ヨーロッパ共同体（EC）の出版物が送られてくるとすぐに目を通す機会に恵まれた。

また、OMEPの推進者であるヨーロッパの幼児教育の指導者たちに直接ふれるとき、このレポートにみるような、広い視野に立った建設的な世界の息吹きを感じさ

せられる。

五年前、一九八三年の一月号の本誌に、「下降する時代の保育を考える」と題して書いたとき、私はヨーロッパを下降する社会のひとつとして認識していた。いま私はヨーロッパを違う眼で見えるようになっていた。

これからの世界は、アジアやアフリカなどを含め、多様な社会の行き交う場である。そのときに、この報告書にみるような教育・社会の理念は、ヨーロッパ文化の産物であると共に、世界が共有しうるものであると思う。

前述の私の小論に「子どもが生き甲斐をもって充実した生活ができる保育の小さな現物がひとつでも増すならば、暗い社会はそれだけ明るさを増すのだと思う。」と記した。ひとりの人のかかわりうる保育の現物は、小さく、微力である。しかし、互いに異質な大人と子どもが、それぞれを生かしながら共同の生活の月日をつくってゆこうとするとき、そこには明るさが生れる。

(愛育養護学校)

注 Council of Europe: The CDCC's

Project No7: "The education and cultural development of migrants". Finalreport of the project group. Council For Cultural Co-operation, School Education Division, Strasbourg 1986, Chairman, M. Louis Porcher.